

目次

理学部植物園— 1990年	清水 勇	1
北部構内の森	松生 歩	3
夢の大学実験植物園	湯本貴和	7
『古事記のフローラ』と植物園	大月 健	12
「京大植物園 花・樹・実の地図作り」に取り組んで	坂本三和	14
「京大植物園花・樹・実の地図」2007年春・秋		15
「地図をつくろう」反省記	西田佐知子	16
生態植物園探訪(1)フランス国立自然史博物館		
附属パリ植物園生態園	大石高典	17
第4回「京大植物園便り」	中島和秀	20

表紙画 寺田晶英

シンボルイラスト かじわられいこ

理学部植物園——1990年

清水 勇

元京都大学生態学研究センター教員

その異変が理学部植物園に起きたのは1990年（平成2年）の9月も半ばを過ぎた頃であった。その日は、近畿地方に台風が接近していたものの直接の影響はまだ少なく、昼間は曇天の蒸し暑い日であった。夜半になって、やにわに北白川一帯は強い雷雨にみまわれ、市内の何ヶ所かに落雷があった。そして雨も止んだ翌朝、植物園に来てみると、唾然とする光景がそこには広がっていた。北縁付近の大木が何本も根こそぎ倒れていたのである（写真1~2）。巨人がいたずらをして、そこらの樹を根っこから次々引っこ抜いたように、いずれも北向きにうち倒れていた。

倒れた樹種、本数や位置などについての正確な記録はいま、手元にないが、写真と植栽配置図などから推定するに、何本かは樹高30m以上のユリノキやエンジュであったようだ。おそらく、前夜の雷雨の際に強烈なダウンバースト（下降噴流）が生じ、これらの樹をなぎ倒したものと思われた。竜巻とともに局地的ダウンバーストは家屋、列

車、飛行機を吹き飛ばして、しばしば大きな被害をもたらすことが知られている。北部構内では落雷によって松の幹が折れるなどの事はあったが、このような大規模な倒木は、後にも先にも記憶がない。

この時の倒木事件については天変地異による不可抗力として処理され、学内で特に問題にはならなかったが、植物園関係のある先輩から、「大木となる樹は剪定などの適切な管理をしなければいつか倒れるものである」といった苦言があった。当時は、植物園の実質的な管理は理学部附属植物生態研究施設が担っていた。乏しい植物園の維持予算と人手が、それを許さなかった事情や、何事に付けても自由放任主義であったせいもあるが、まさかこんな強烈な突風に襲われるとは、誰も予想していなかったのである。

これが起こった1990年頃の理学部植物園では、ツマキチョウが春先に気ぜわしく飛び回り、東ペリの溝では九輪草が可憐な赤い花を咲かせ、ウマノスズクサの群落にふわふわとジャコウアゲハが卵を生み、ニホンミツバチがぶぶん樹の洞から飛び出し、アカハライモリが口を明けてモリアオガエルのオタマを待ちかまえ、アカスジキンカメムシの幼虫が集団で幾何学模様を描き（写真3）、池の端では目つきの悪

いアオサギが疎水からまぎれ込んだ小魚を狙っていた。なんだか、その頃の園内には、今よりおおらかで豊かな生きものにぎわいがあったような気がする。

そして、別の「突風」が吹き抜けたために、この年の翌年4月、植物生態研究施設は改廃された。その歴史

(1964-1991)は、「京都大学百年史：部局史編I」（百年史編集委員会発行）の「附属植物園」の項目の中で、わずかに記されるのみである。一方、倒れたユリノキの巨大な根株の一つは、今でも植物園の同じ場所に、黒々としたモニュメントのようにして横たわっている（写真4）。



写真(1) なぎ倒されたユリノキ



写真(2) なぎ倒されたユリノキ



写真(3) アカスジキンカメムシの幼虫



写真(4) ユリノキの現在 (2008.5.15)

北部構内の森

松生 歩

京都造形芸術大学日本画コース教授

京大植物園の存在を知ったのは2006年の夏でした。

京都造形芸術大学の鎌田東二教授（現・京都大学こころの未来研究センター教授）を代表とする「モノ学・感覚価値研究会」の夏合宿で一緒に、「オイケノカップ」さんこと京都大学博士課程の大石高典さんに植物園の事をお聞きして以来、行ってみたいという気持ちに拍車がかかり、9月には早速、観察会に参加していました。

大量の蚊に刺されながら初めて歩いた植物園。初めてなのにどこか懐かしく、前に来たことがあるような、あるいは何時か来るようになっていた場所のような、不思議な感覚に見舞われました。

樹木から雑草まで、決して過保護にされず、さりとして放埒でもなく、「おそらくこの植物は本来この様に生きたかったのだろう」と思われるような、美しいハーモニーに満ちた、夢の森がそこにありました。

「ああ、描きたかった森だ。ここには物を語る植物たちが居る」と、嬉しさが込み上げて来ました。

京大植物園を訪れたかった理由は、その森の様子を伺ったことと、もう一つ、植物園と画家・三橋節子との関わ

りを教えて頂いたことにもよります。

1974年に35歳で夭折した日本画家三橋節子は、京都北白川に暮らし、父親が京大の教授だった事もあり、幼い時からこの植物園を遊び場にしていて、植物園の池の近くに取材した作品も描いています。

1977年、高校生だった私は、絵を学びたい気持ちを両親には言えず、進路を迷っていましたが、ちょうどその年に出版された、哲学者・梅原猛著『湖の伝説—画家三橋節子の愛と死』を読んで、「絵というものは片手間でもできるものでも趣味にする程度のものでなく、命まで託せるものなのだ」と思い至り、著者が当時学長を務められていた京都市立芸術大学への進学を目指す事になったという経緯がありました。その本を読んだ時の感動や梅原先生の講義での数々の言葉、また三橋節子の作品は、私の中に深く刻まれていましたが、彼女の結婚以前の縁の地に関する事などはすっかり記憶から消えていたのです。

ですから、今現在私が京都に居るのみならず、節子の暮らした北白川にある大学で教員をしていること、今またその縁の京大植物園とご縁が生じたことに、見えない糸のようなものを感じたのです。

その後、植物園園丁の中島さんを初め、関係者の皆さんの助けを頂いて、植物園を一人歩き、写生する時間を得ることが出来ました。皆さんがとても暖かく受け入れて下さったこと、そし

てこよなく植物園を愛しておられる姿を見るに付け、植物園は「生きている夢の森」というだけではなく、人々の思いを繋ぐ存在であり、誰かが帰ってくるのをいつも待っていてくれるような、幸福の象徴のような印象が私の中に根付いて行きました。

大通りから農学部を抜け、植物園に数歩足を踏み入ると、もう既に空気が違います。

ここには喧騒に満ちた外界とは隔絶された別種の時間が流れ、樹木も草も花も、鳥たちも虫たちも、土も水も風も光も、外界では隠していた本当の姿を開示してくれます。

その中に佇んで光を感じ、風を感じていると、「これが本当に生きているという事なんだ」という実感と、限り無い幸福感が湧いてきます。「自分も木や草や鳥たちと同じ生き物なんだ。水や空気の分子と同じ価値の存在なんだ」という実感も湧いてきます。

植物園内をめぐるうちに、どうしてもそこに足をとどめたくなる場所を見つけました。そこは節子が愛したであろう池の畔の、むくろじの木の下でした。

むくろじは「無患子」と書らしく、インドではその黒い実をつないで数珠にしたり、実の外皮が石鹸として使われたりしたのだそうです（園丁の中島さんが教えてくださいました）。足元に落ちていた白い半透明の風船のような外皮ごと家に持ち帰り、水に漬けてこすりあわせてみたら、本当に泡が一

杯出てきました。日本では、その漆黒の硬い実が、羽根突きの玉に使われています。『無患子』という名も、羽根突きも、子供の健やかな成長を祈る気持ちに繋がっているようです。

植物園のその無患子はとても背が高く、藤の木が絡みついて、同化して一体になっているかのようでした。木を見上げていると、懐かしいような、心の奥で響きあうような、切ないような、嬉しいような、悲しいような……何ともいえない気持ちになって、どうしてもその木が描きたくまりました。

そこで日を改めて、ベニヤ板より大きな紙を三枚持って植物園に通い、その大きな木を、等身大くらいに写生する事にしました。あまりに藤の枝が複雑に細かく絡みついているので写生も困難を極めました。この期間は本当に幸福な日々でした。巨大な紙を布団か敷物のように自分の膝からはるか前方まで広げるだけ広げて写生をしていると、風とともに大きな紙が翻り、バラバラバラと大きな音を立ててあたり一面に藤の蕾が降り落ちてきます。自分の頭にも絵の上にも周りの草地にも容赦なく雹のように蕾が叩きつけ、辺りは一面藤色、いい香がします。

自分も草地の一部になった気分です。自然に笑いが込み上げてきます。そうしてどんどん描き進める中で、自分の中にもたくさんの言葉が溢れてきたので、写生の傍ら、書き留めました。

それが、以下のような詩です。

藤と無患子

不二と無垢の木
ひとつになって天地を結ぶ
虚空へ虚空へ
どこまでも腕を伸ばす

竜のように
血脈のように
見えざる炎のように

うねりながら
藤はむくを包み また透過する

むくは不動
風をはらみ
聖水を身にめぐらせ
悠久の夢を抱く

藤とむくはふたつながら
沈黙のうちに
日月の光を享受する

静止する時よ
しかもその瞬間の中で
すべてはめぐり
生命を謳う

遠い声と 楽の音――
木になった日

霞のように降り落ちる藤の花
たちこめる紫の香り
森にこだまする澄んだ鳥声

(今日は満月 夜半には晴れる)

季節が開かれる
小径の苔が緑に染まる
天に伸びる木は 静かに呼吸をする

何がわたしに訪れても
全てを許し 身を預けたまま
全てのものと共に 天の声を聞く

(まっすぐに天へ そして地へ)

わたしはここにおいて
しかも遠くに感覚を伸ばす
本当の夢を見る

わたしの中の回廊を通り
わたしの本当の家路を辿る
遙かな虚空
いのちの生まれた場所――

京大植物園は、北部構内の神聖な森
です。

清浄な野生の庭園。

そこには植物たちの、にごりのない
透明な感情が流れ、個々の波動が紡ぎ
合わされて優しい音楽となって充満し
ています。

光溢れる草原や秘密を隠しているよ
うな木陰に、ちらちら見え隠れする幼
子の幻は、節子や私自身も含むこの森
の訪問者の、心の姿の残像だったのか
もしれません。

天へ



結び



地へ



二〇〇七年初夏制作。
二〇〇七年七月「松生歩・来野あぢさ・猪熊佳子
三人展」(京都市立文化芸術会館)で発表。
作品サイズ各一三〇・三cm×一六二・一cm

夢の大学実験植物園

湯本貴和

総合地球環境学研究所

春は眠い。きょうも所長の長いお話を聞いていて、ついうつらうつらとしてしまった。

——ここは夢の中

たいへんだ！ もう樹木の芽が動き始めているのに、まだ調査する木を決めていなかった。やばい！ どうしよう？

そうだ！ 大学実験植物園がある。今年は、常緑広葉樹の新しい枝の伸び方を研究するはずだった。えーと、でも樹種も何も全然決めてないぞ。でも大学実験植物園にいけば、近畿から西日本、南日本一円の主要な樹種がそろっているはず。だれでもが入れるわけでもないのに、いたずらをされる危険も少ない。とりあえず、大学実験植物園にいてみると……。

「大学実験植物園樹木データベース」

クロガネモチ。うーん、この樹種はなかなかよさそうだ。大学実験植物園内では無線 LAN でインターネットに接続できる。持ってきたコンピュータで大学実験植物園のサイトでみると…
…なるほど！ 植物園内に30本は使

える木があるぞ。「大学実験植物園樹木データベース」にアクセスし、「クロガネモチ」でデータをソートすると、瞬く間に、それぞれの胸高直径や樹高が一覧でき、つぎにマップで検索をかけるとそれぞれの個体の植物園での位置がすべてわかるという仕組みなのだ。一昔前までは、この作業をするだけでも丸1日かかったというのに。

あと同じモチノキ科でほかに個体数が20以上の樹種は？ 常緑、虫媒、鳥散布を兼ね備えた樹種では？ 京都盆地に自生があるものは？ こういったさまざまな条件を入力すると「大学実験植物園樹木データベース」はたちどころに答えてくれる。また「大学実験植物園画像データベース」にリンクして、樹木の葉や花、果実はもちろんのこと、新葉や冬芽、これまで観察された葉食者や送粉者の昆虫、果実の散布者の鳥まで即座にみることができるのだ。種子や花粉の顕微鏡写真もあって、これは大学実験植物園での調査以外でも、種子散布の研究や遺跡から発掘された植物遺体の研究に、大いに役に立っているという。

ユーザー登録・調査計画提出・専門委員会による審査・事後報告

でも、いまクロガネモチで調査をしている別のひとがいるとお互いに困るかもしれないね。そういえば以前は、せっかく調査していた枝が、突然、誰

かに別の研究目的で切られちゃったっけ。あれはへこむよな。文句を言ったって、あとの祭りだし。

じゃあーっと。ソートしたデータの「過去の調査履歴そして現在進行中の調査」の欄をみると……ふむふむ、十年ほど前に、理学部の学生実習で光合成を計った記録がある。そのデータは「XX研究室に保管」とある。これはボクの調査でも参考として使えるな、きっと。そしていまは……虫こぶの調査をしている昆虫の大学院生が「IkRo010 と IkRo011 と IkRo012 の3本を観察中」とある。

ボクの調査は枝をマークして、長さを計るだけだから、あんまり影響はでないと思うけど、まずは研究計画書を作成しなければ。以前に「大学実験植物園ユーザー登録」は済ませてあるから、一から入力しなくても大丈夫。所属や指導教官、連絡先などはあらかじめ登録してある。書式をダウンロードして、研究したい木の个体番号と研究内容、研究期間を書けばいいのだな。そのまんま「大学実験植物園利用届」に添付して研究計画書を植物学教室に電子申請をするんだよね。

この研究計画書は、植物学教室を中心に全学的に組織された専門委員会によって審査される。理学部の教員に限らず、また植物だけではなく、昆虫や鳥、それから造園、環境教育の専門家も含まれている。いっぼうで新しい研

究計画が申請されるたびに「大学実験植物園ユーザー登録」している人たちのもとには、「新研究計画申請あり」というお知らせがくるんだっけ。現在進行中の調査があるユーザーには、新しい研究計画が自分の研究に支障をもたらすかどうかチェックできる仕組みだ。もし、自分の研究に支障をきたすと判断したら、専門委員会に意見の申し立てができる。

専門委員会では、随時受け付けている研究計画の案件についてはメーリングリストで審議されるので、希少種の採集とかを含まず、非破壊的で大学実験植物園の生物相や環境にとくに大きなインパクトを与えないもの、進行中の他の調査に悪影響が及ばないと判断できるものは、許可がでるまで3、4日しかかからないよ。希少種の採集や枝の採取など、破壊的なものを含んでも十分に環境に配慮し、採集の数量が理にかなったものなら、大丈夫。他のユーザーからのクレームも、専門委員会で妥当性が公正に審議される。計画許可が降りると自動的に「大学実験植物園樹木データベース」の管理者にカーボンコピーが送られるので、「過去の調査履歴そして現在進行中の調査」に記載されるというわけだ。

ただし、調査終了後は、そのデータの所在と発表形式について速やかに報告する義務があるし、論文をだすときに大学実験植物園を利用したことを明

記しなければならない。もちろん印刷された論文は、植物学教室にも一部送って、保管してもらうのだ。大学実験植物園の実績になるからね。この義務を果たさず、再三の催促にも応じない悪質なユーザーは、研究申請ができなくなることもあるから注意。また、植物園内での研究計画から大きく逸脱した行為や、他のユーザーの調査を妨害する行為も当然、問題になる。あまり研究室としての対応がひどいと連座制が適用されて、その研究室、その指導教官のもとでの研究計画がいっさい受け付けられないこともある。もともと、ここまで悪質なケースは過去に一件あっただけだ。

大学実験植物園の維持管理・専属園丁の役割

では天気もいいし、確認のためにひととおり、クロガネモチの木を見て回るとするか。

コアエリアの入り口あたり、大学実験植物園専属の園丁のNさんに挨拶。「こんにちは。」「やあ、こんにちは。きょうは何の調査だい?」「いやー、常緑広葉樹の新枝の伸長を調べようと思って。」「むかしのH先生の研究の続きだね?」「まあ、そういうことです。」「あそこのあの木はH先生がよく調査をされていたよ。」長らく園丁をされているNさんは、植物園で行われてきた研究のすべてをよくご存知

だ。研究について適切なアドバイスをもらうことも多い。大学実験植物園での研究を遂行するにあたって、欠くことのできないひとだ。

基本的には、この大学実験植物園のコアエリア内では伐採はもとより、剪定や下草刈りは行わない。しかし、歩道の確保、倒木の処理、周辺私有地への落葉対策などに、最低限の管理の手を入れることはありうる。この場合には、事前に専門委員会でよく内容を検討し、適切と判断された作業を適切な方法でおこなう。

基準は、大学実験植物園の生物相や環境に大きなインパクトを与えないこと。研究対象である樹木などの生物相は、大学実験植物園の原資だからね。もちろんユーザー登録者も、管理についての意見を専門委員会で述べることができる。専門委員会はその意見を検討し、根拠のあるものについてはできるだけ取り上げなければならない。ユーザーによって研究で使われてこそ、大学実験植物園の原資に価値が生まれるという考え方だから、これは当然のことだ。

園丁さんは植物園の維持管理に関わる作業の担い手であるが、もちろん専門委員会にも出席して自分の意見を言える。長年、植物園の生き物たちとつきあって得られた経験と知識に基づく見解は、各専門の先生の考えを凌ぐことだってある。専門委員会のメンバー

もそれは十分にわきまえていて、要所
 要所では N さんに意見を求める。専
 属の園丁さんは、生物相や環境に大き
 なインパクトを与えないという原則を
 とても大事にしてくださっているの
 で、作業もきめ細かく丁寧だ。指示さ
 れた作業をできるだけ手間をかけずで
 きるだけ速く完了することがポリシー
 である外注や外部調達では、とてもで
 きないことだ。この春に若い新しい園
 丁さんが採用されて、N さんの技術と
 経験を受け継ぐことになったと聞いた。
 どんな青年か、楽しみだな。へ
 えー、女性？ またあとで話をしてみ
 よう。

多様な研究活動の展開

N さんと別れて植物園のコアエリア
 に進む。鳥の調査をしている K 君に
 会う。「きょうは何の鳥がおったの？」
 「やだなー、ユモトさん。毎日の鳥リ
 ストは『きょうの大学実験植物園の鳥』
 に即時にアップされているでしょう？
 それ見てくださいよ。」「あー、そやっ
 た、そやった。たいがい毎日誰かが鳥
 の調査をしとるし、その記録がたまっ
 とるから、この大学実験植物園は、い
 つどんな渡り鳥がやってきて、いつ去っ
 ていくかがちゃんとわかるとる京都で
 も貴重な場所なんよね。そのデータ使っ
 て、渡りの時期と木の実の稔りぐあい
 の関係を調べた研究もあったやん。」
 「そうですよ。そのシステムつくった

の、ユモトさんじゃないですか。」

「そ、そやったかも。」「鳥だけじゃ
 なくて、キノコでも訪花昆虫でも、京
 都でいちばんデータがそろっているの
 はここだと大いばりでしたよ。」「そ
 や。『大学実験植物園キノコデータベース』は I 君と S 君の力作や。これまで
 大学実験植物園で見られた子実体は全
 部、出現した場所と年月日、証拠標本
 の所在地、それにキノコの同定によく
 使われる胞子表面の走査電子顕微鏡の
 写真、ITS 領域の DNA 配列まで入っ
 とんねん。」「そうでした。それを使っ
 て新種が記載されたことが何回もあり
 ましたね。ただキノコや昆虫のように
 採ればなくなるもの、あるいは植物で
 も希少種については、データベース閲
 覧にもアクセス制限があって、ユーザー
 登録のときに申請して、専門委員会
 で認定されるのですね。」「そやねん。
 いろんな研究がおんなじ場所でやられ
 とるメリットを活かさんといかんけ
 ど、それが悪用されたら元も子もない
 もんな。」

K 君と別れてしばらく歩く。

おや？ クログネモチの IkRo009 は
 どうも樹勢がよくないぞ。隣のヤブツ
 バキには、えーと、CaJa104 か、毛虫
 が大発生している！ 今回の毛虫はチャ
 ドクガだけか。これらの情報は、さっ
 そく観察者と観察日を明記して、「大
 学実験植物園樹木データベース」の管
 理者に送らなくっちゃ。「大学実験植

「植物園樹木データベース」はこの植物園の要として、利用者が増えれば増えるほど、新しい情報がどんどんたまって便利になるんだよな。利用者もデータベースを自分で使うだけでなく、なるべく他のひとに役に立つ情報を付けくわえなくちゃね。

大学キャンパス内での植物園の位置づけ

そろそろお昼休みか。おや、向こうからやってくるのは植物園観察会のグループだ。大学キャンパス内にある大学実験植物園では、頻繁に観察会が催される。植物園にいる生き物を観察するのが主だが、ときには俳句やスケッチの会もある。春の早朝に鳥のさえずりを楽しむ会や、秋の夜長に鳴く虫の声を聴く会は、とくに人気が高く、事前申し込みであつという間に定員に達してしまうそうだ。

大学はいろいろな分野の専門家がたくさんいるので、講師にはこと欠かない。同じものを見ているつもりでいても、専門によって全然視点が違うということを発見するのは、大学ならではの刺激的ともいえる体験だ。この刺激的な体験を多くのひとに味わっていただく観察会をおこなう場所として、大学実験植物園は最適だ。植物園で行われている研究成果を専門外のひとに知ってもらいたいチャンスでもある。ふだんは大学の教職員を中心とする観察会

だが、年に何回かは、地域にお住まいのひとたちを集めて、特別の催しをする。この催しを楽しみにしていて、毎回参加してくださる方も多いと聞いている。これもベースになっている大学実験植物園での研究活動が充実しているからだろう。また、こうした植物園の学内外のファンを日頃からつづけておいたおかげで、植物園をつぶして新しい建物や駐車場をつくろうという計画が持ち上がったときも、しっかりと反対できたんだよな。きょうの観察会もおなじみの顔がそろっているが、さて講師は誰だったかな？

夢から醒めて

「おい、ユモト君、なに寝てんだ。君に言っているんだよ。」「はー？ あつ所長！ えーと、それがヤブツバキがですね……。せっかく、これからおもしろい研究がいっぱいできそうだったのに、起こされちゃったよ。こんな大学実験植物園、どこかになかったっけ？

※これはあくまでも夢の話、フィクションなので、現実に存在する人物や植物園とはいっさい無関係です。あしからずご了承ください。

『古事記のフローラ』と植物園

大月 健

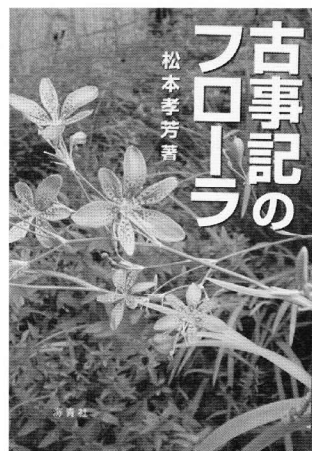
農学部図書室

松本孝芳さんの労作『古事記のフローラ』が手許にある。著者の松本さんは農学部の教授で、生物繊維学分野の研究者である。『古事記のフローラ』は彼の仕事とは直接には関わらない。「あとがき」で「古事記に出てくる植物やそれに関連した言葉を探し、カードに書き出す事を始めたのは、かれこれ二十数年以上も前かと思う。古事記の中にどのような植物が描かれているか、興味を持ったからである」と松本さんは書いている。私には『古事記』から植物を発想する考えはない。自然科学者だから考えられるものなのだろう。

『古事記のフローラ』の発行は2006年3月であり、そのとき松本教授は定年退官を迎えている。退官記念の著作なのである。

農学部総合館は理学部植物園のすぐ前にある。松本さんもときどき植物園を散策していたようだ。『古事記のフローラ』には75種類の植物が紹介されている。その中のタチバナ、サカキ、ティカカヅラ、ミズメ、マユミ、シャシャンボ、ニワトコ、ハンノキの写真

『古事記のフローラ』2006年 海青社刊



は植物園で撮影されている。松本さんは大津市に住居を構えている。だから、古事記に関わる植物も大半が琵琶湖の周辺か京都で探し出したものである。なかには樹齢730年のビャクシンを求めて鎌倉建長寺に出向き、樹高58mのスギを見に秋田県二ツ井町に、天然記念物に指定されている巨木スタジイを撮影するために鳥取県琴浦町へと遠出をしている。古木、名木を知ると訪ねて行かざるをえなくなったのだろう。

『古事記のフローラ』の項目の構成は、まず古事記の文章を示し、そこに採用された植物を項目としてあげ、写真とその植物の生態や特徴を記述していくというかたちをとっている。例えば、「葦」である。葦は古事記のなかで最初に出てくる植物である。

天地初めて発けし時、高天の原に成
 れる神の名は天之御中主神……
 国稚く浮きし油の如くして、久羅
 下那須多陀用幣梳時、葦芽の如く萌
 え騰る物に因りて成れる神の名は、
 宇摩志阿斯詞備比古遲神。

葦 アシ イネ科ヨシ属

葦芽、あしのみ、世界の温帯、暖帯、
 亜寒帯に広く分布し、日本各地の湖沼、
 川岸にごく一般的に生える宿根草（多
 年草）。……

といった具合である。これに琵琶湖
 岸で撮った葦の写真が載せられてい
 る。神は知らない。人は水辺に国らし
 きものを作った、これは理解できる。
 葦はまた、人々の簡素な家の屋根を葺
 くのに必需品だった。

『古事記のフローラ』に触発されて
 岩波文庫版『古事記』を読み始めたが
 途中で頓挫し、いまに至っている。だ
 から一概にはいえないが、神（人）は
 簡単に生まれ、神（人）は簡単に死ぬ
 という、印象がぬぐえない。それは、
 小気味いいくらいだ。『古事記』が自
 然のなかの神（人）を前提として書か
 れているからだろう。同じ印象を持っ
 た小説に深沢七郎の『笛吹川』がある。
 甲斐の武田三代（信虎・信玄・勝頼）
 を庶民の視点から表現した作品で、戦

乱の渦中でおびたしい生と死が交叉
 する。『古事記』と一脈通ずる何かが
 あるのだろう。

私は京大植物園の観察会に関わって
 いる。松本さんの『古事記のフローラ』
 を読んで、まず思ったのは京大植物園
 に該当する植物がどのくらいあるのだ
 ろうかということである。中央に池が
 あるので、葦はある。ブナ科のプロク
 クには椎がある。秋にならなければ分
 からないが曼珠沙華の花も見た記憶が
 ある。先日見たら、葛は南向きの塀の
 狭い編み目から顔を出していた。75
 項目のうち、半分近くはあるのではな
 いだろうか。いま、大石君のブログ「京
 大植物園 today」を借りて「古事記の
 フローラ 植物園編」をやってみたい
 と考えている。説明文の多くは、『古
 事記のフローラ』から援用させていた
 だくことになるだろう。松本さん、ご
 容赦下さい。

「京大植物園 花・樹・実の地図作り」
に取り組んで

坂本三和

京都大学大学院農学研究科博士課程

参加者全員で植物園内の花や樹木や実の地図を作る、新しい形の観察会を名古屋大学博物館の西田佐知子さんと合同で企画し、2007年5月と9月に開催しました。

◇第50回観察会 「京大植物園花と樹の地図を作ろう」

2007年5月17日(木) 12:05～13:40

晴れ 参加人数43人

◇第54回観察会 「京大植物園花と樹の地図を作ろう Part II」

2007年9月27日(木) 12:05～13:40

くもり 参加人数23人

(各回の参加人数はスタッフも含む)

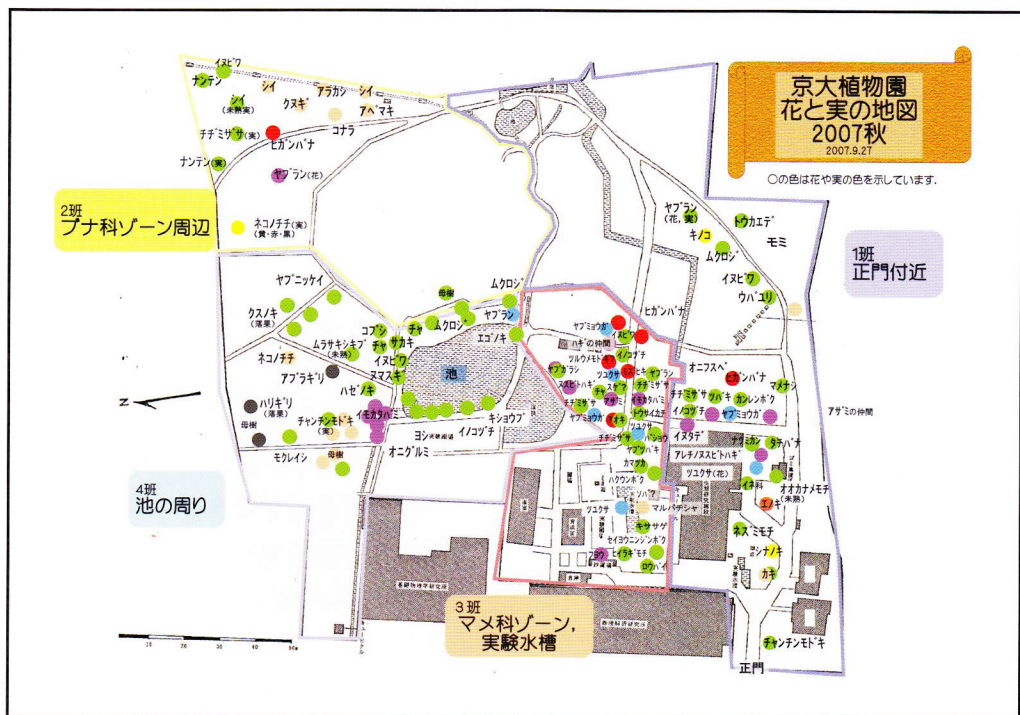
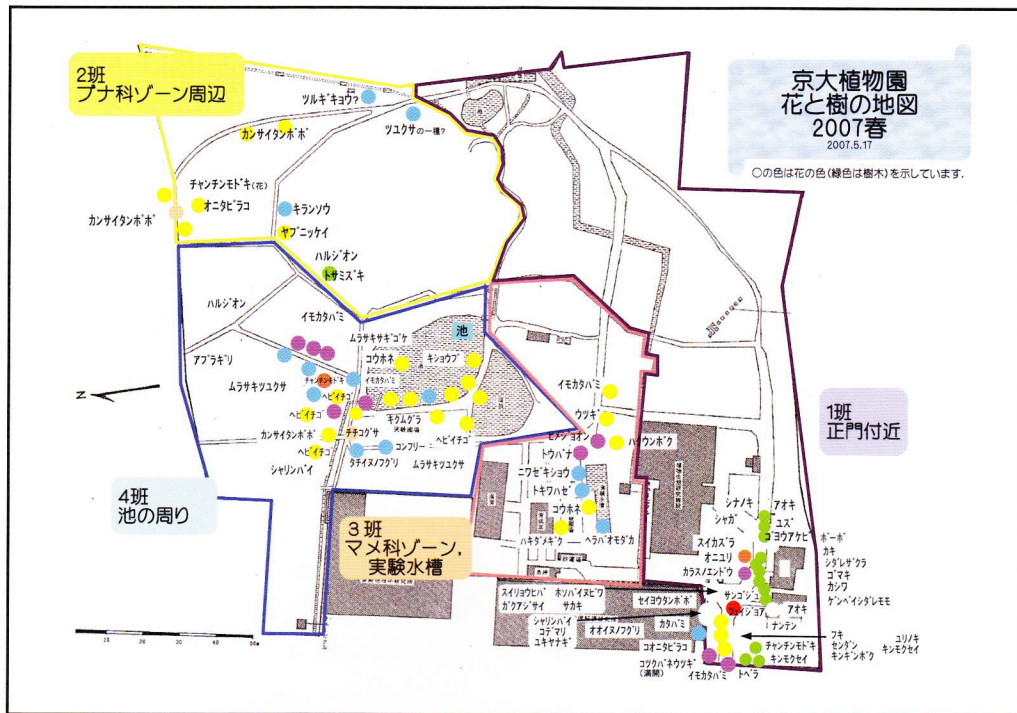
地図作りは以下のような流れで行いました。まず、植物園の白地図を模造紙サイズに印刷して四つの区画に切り分け、参加者とスタッフも四班に分かれて地図の一区画ずつを担当しました。この白地図に、目をひく大木や、花をつけている草や木の名前を書き込み、花の色のシールを貼りつけていきました。植物の名前が分からないときは農学研究科や理学研究科の大学院生を中心としたアシスタントに対応してもらいました。40分ほど後に集合し、

各班が記入した地図を一枚の大きな板に貼り合わせると、京大植物園全体の「花と樹の地図」がめでたく完成しました。地図を眺めながら、担当した区画の特徴やみどころを紹介しました。

9月は同じやり方で花と樹に加えて実も探しました。植物の実は、動物にくっ付いたり、食べられたり、風で飛ばされたりと様々な形で運ばれるので、どのタイプなのか、また、地面に落ちた実については親の木(母樹)からどのくらい散らばっているかも調べました。全体的には熟していない緑色の実が多かったですが、秋が深まるにつれてどのように変化していくのか楽しみでした。

各回のデータは後日パソコンに打ち込んで一枚の地図にまとめ、印刷して希望者に頒布しました。2007年11月の「京大植物園まつり」の写真展「京大植物園の四季 Part V」でも展示し、地図にある花・樹・実の写真も併せて見られるようにしました。

地図作りの感想文には、「いつもの観察会と違って少しとまどった」という声もありましたが、「楽しかった」「これまで漠然と観ていた植物の名前を知ることができた」といったものが多く、概ね楽しんでいただけたようです。私も参加者の方に花の名前を教えていただき、周囲の人たちとのやりとりが新鮮でした。できれば今後も開催し、京大植物園の自然を記録することにもつながればと思います。



「地図をつくろう」反省記

西田佐知子

名古屋大学博物館

植物園観察会では、実に様々な方が様々なテーマでお話なさっているのに驚きます。「このまま何年も続けていけたらすごいけれど、ネタが尽きないのかなあ」と心配したりもしていました。そこでいっそ、みんなで調べるイベントを始めてはどうだろうと提案したのが、2007年春と秋の「花と実の地図作り」でした。

自分の目と足でどんな植物がどこにあるのかを探すことは、植物園を自分にとって特別な場所にする大きなきっかけになると思います。自分で見つけた花や実の鮮やかな印象が、紙面の地図に点を落とすだけでなく、心の中の「植物園の思い出の地図」に、灯りのような点を落としてくれるに違いありません。

こんなわけで始めた地図作り。第二段の秋は、スタッフ側もなれて作業も順調に進み、素敵な地図ができあがりました。会の終盤には院生に植物園にまつわる野鳥と実の話までしていただき、手前味噌ですが、充実した会になったと満足したものでした。

では、本当にこの企画がよかったのか。実は、私は少し不安です。という

のも、秋は春に比べ、参加者が激減したからです。参加者よりスタッフの方が多いくらいでした。春の会を「すごく楽しかった！」と言ってくくださった方もあったのに、なぜ秋の参加者が少なかったのだろう。

憶測ですが、参加者が求めているのは、やはり「講師から新しい話を聞く」ことなのではないかな、ということだと思います。今回は院生のお話をあらかじめ宣伝していなかったのが残念でした。「地図作り」の楽しさは、自分の足と目で調べるところにあるように思います。そこから何を考えるかは自分次第です。そういう意味では、この会の楽しさはいつもの会の楽しさとは別の方向にあり、それを、参加者の方々はあまり求めていないのかもしれませんが。そう考えると、地図作りの楽しさも知ってもらいたいけれど、同時に軽い話題提供も最初から宣伝して、いつもの「学ぶ楽しさ」も期待してもらえるよう工夫しておくべきだったのかな、とも思います。

二度目の参加者が少なかった原因は分からずじまいです。しつこくもう一度「地図作り」を企画すれば分かるかもしれません。でも、熱心なスタッフの方々のことを思うと、参加人数があらかじめ期待できるよう、今後の「地図作り」は少々工夫の余地ありだと、反省しきりです。

生態植物園探訪①
フランス国立自然史博物館付属
パリ植物園生態園

大石 高典

京都大学こころの未来研究センター

京都大学理学部植物園（京大植物園）の特徴の一つは、大正12年（1923年）の創設以来の「生態植物園」という植生の維持管理の考え方です。それは、標本展示を目的とした見本園や栽培園とは異なるとされ（理学部植物園沿革）、自然生態系に近づけた粗放的な、かといって完全な放任でもないような、微妙な手加減の管理を特徴とします。その結果、外部から風や鳥によって散布された自然植生と、研究者によって植えられた人為植生の入り混じった「擬似自然」（湯本、2004）と呼ばれるような不思議な景観が出来上がっています。1973年に行われた植生調査では、園内の樹冠面積の8割以上がエノキやムクなど自然植生になっていたため（Hatakeyama et al. 1973）、これらの樹木の除伐が行われました。どこまで人の手を入れるか、はこのような歴史を持つ「生態植物園」の管理の上では大きな問題です。大学人や市民に心の安らぎを与えるだけでなく、「（生態園という）場を利用してどのような研究があり得るのか、具体的な研究計画が策定されることが望ましい」（岩槻、2004）という指摘を踏ま

えれば、この植物園のなにを生かした研究ができるのか、が問われなければならないでしょう。

さて、生態植物園は、京大植物園だけにしかないかということ、そんなことはなく、日本にも名前がついているだけで少なくとも5件以上、世界に目を向ければさらに多くの生態園があります。そして、一口に「生態植物園」といっても、様々な考え方や実態があるはずです。そこで、このコーナーでは、日本や世界の様々な生態植物園の現状を比較検討する中から、「生態植物園」の意義や可能性、問題点を考えていきたいと思います。今回は、まず京都と同じように歴史をもつ古い都市の中に位置し、また博物学と深く関わりを持って発展してきたフランスのパリ植物園の生態園をご紹介します。

パリ植物園（Jardin des Plantes, Muséum National d'Histoire Natutelle; フランス国立自然史博物館付属パリ植物園）は、セーヌ河のほとりにある西ヨーロッパ屈指の植物園です。歴史的にも、17世紀にビュフォンによって設立され、この植物園と標本庫を基盤に自然史博物館が育ってきたという歴史があります。まさにフランスのナチュラル・ヒストリーの牽引役としての役割を果たしてきたと言えます。総面積28haの大きな敷地には、動物園が併設され、大温室や広大な見本園があり、植物学校(Ecole de botanique)では、一般対象の分類見本園が広がっています。中央のフランス庭園周辺では、ジョギングを

したり、ピクニックをする市民の姿がみられます。大都市パリの文教地域にあって、公園としての側面と、社会教育の側面、そして研究教育利用の側面を併せ持った広大なパリ植物園の一角に、小さな生態園(Jardin écologique)があります。わずか 0.8ha (京大植物園は現在 1.2ha) に過ぎない小面積ではありますが、ここでは、研究者・関係者以外の立ち入りを完全に禁止して、いくつかの野外実験が行われていました。そのうちのいくつかは、次のようなものです。

- ①パリ盆地の在来植生の復元実験。
- ②様々な強度の草刈り試験区による、草本群落への家畜のグレイジング効果の検証。
- ③空き地区への植物の侵入・定着に関する実験。

生態園の責任者のフィリップ・バレ(Philippe Barré)さんによれば、フランス国立自然史博物館の生態植物園の面積は、8200 m²(0.82ha)で、1936年に、Pierre Allorge 博士によって創設されました。1960年から、研究のために全ての訪問客に原則入園禁止にしており(訪問者による攪乱を防ぐため)、生態園の管理は、園丁2人が、多分野の研究者と協力しながら行っているとのことでした。主たる研究利用は、顕花植物の研究者のほか、若手の昆虫研究者や鳥類研究者、小型哺乳類の研究者による動植物の生態学的相互作用に関するものが多い、とのことでした。環境問題の一つとして、都市の生物多様性への関

心が高まる中で、市民への展示・啓蒙が中心のパリ植物園全体における生態園の研究・実践上の重要性は増してきている、とのことでした。

結果としての自然生態園と、意図された生態植物園という違いはありますが、研究室に程近い生態植物園の利用法・方向性として、パリ植物園のやり方(明確な研究目的のもとに、メリハリをつけた維持管理をすると同時に、若手研究者が安心して身近な実験・観察の場として使えるようにしている)は、京大植物園のあるべき今後のあり方にも参考になる事例だと言えそうです。

参考文献・ホームページ

- 1) 京大植物園沿革
- 2) Hatakeyama, I., G. Murata & Tabata, H. (1973) "A List of Plants in the Botanical Garden of Kyoto University and Some Ecological Data." *Memoirs of the Faculty of Science, Kyoto University, Series of Biology* Vol. VI, pp. 91-148.
- 3) 岩槻邦男 (1991) 「シリーズ世界の植物園パリ植物園」
プラント 16: pp. 44-50.
- 4) 岩槻邦男 (2004) 『日本の植物園』東京大学出版会
- 5) フランス国立自然史博物館・パリ植物園公式サイト
<http://www.mnhn.fr/museum/foffice/transverse/transverse/accueil.xsp>
- 6) 湯本貴和 (2004) 「フィールドワークの第一歩は植物園から」

エコソフィア 13: pp.22-27.

注：Pierre Allorge フランスの植物学者、
生物地理学者（故人）。フランス国内や
マダガスカルなど旧フランス領植民地

にて植物相の研究を行った。主著に
Les associations végétales du Vexin français.
Université de Paris など。



博物学者 Jussieu ファミリーの一員によって
1747年に植えられたエンジュ（*Sophora
japonica*: FABACEAE）。



パリ植物園生態園の風景



生態園の看板：研究を展示する空間として、
他の区域とは異なり、一般市民の立ち入りは
禁じられている。



生態園の周囲に掛けられた十数枚のパネルにより、生態園の意義や試験の意図が、
詳しく説明されている。

第四回 『京大 植物園便り』

《夢の森へ》

園丁 中島 和秀

☆懐かしい場所

人にはそれぞれ、その人生に於いて《懐かしい場所》が、幾つか有るのではないでせうか。過去・現在・未来の時の流れの中で、そこはかとなく臍で、夢のやうにはかない場所。すみれの花の匂ひが微かに漂ふ、明日への思ひ出。

〈過去〉

地上とは思ひ出ならずや

イナガキ タルホ

懐かしい場所は、父が柔道の稽古で膝を痛めて入院して居た、「警察病院」のビルの屋上での記憶。大阪の下町を見下ろす事の出来るその屋上で、物干し竿に掛けられてゐた白衣や繻帯が、春風にゆるやかに揺れて居た。通天閣の特徴のある塔を、母と幼い自分は西に傾く陽と共に、永い間やるせなく無言で見詰めて居たやうな気がする。そして若い母は何気なく憶ひ出したやうに、やをら唄を口ずさんだ。

♪ 赤く咲く花 青い花

この世に咲く花 数々あれど
涙にぬれて つぼみのままに
散るは乙女の 初恋の花

『この世の花』

作詞 西条八十
唄 島倉千代子

〈現在〉

自分がかうして約十二年前より、京大植物園の園丁として働かせて頂き、現在に至って居ます。京都市左京区百萬遍東の街中に、ひっそりと佇むこの小さな森も、とても懐かしく大切な場所となりました。出来る限り人為的に手を加へる事なく、自然のままに維持する事。生態植物園としての役割を、八十五年間に涉り続けて来られたのは、この場所を利用しての様々な研究や調査・実験と、多くの人々の努力の賜物に違ひありません。今は初夏、池には鶯が飛び交ひ、かはづ達の合唱も聴こえて来ます。あざさる、のりうつぎ・がくあざさるの花々が、雨に濡れて揺れてゐる。

〈未来〉

馬はその死後どうなるか……。
光の馬になるに決っている。

イナガキ タルホ

編集後記

京大植物園は面白い。見る人によって、何の役にも立たない「雑木、雑草」の集まりだとみなされたり、はたまた「神聖な」森と見られたり。ここに人間が人間を見る人間観のふれ幅の反映を見てしまうのは河童だけだろうか。

2008年6月19日

御池之河童

京大植物園を考える会ニュースレター

ゆくのき通信 第4号

発行：2008年6月30日 京大植物園を考える会

印刷：北斗プリント社

事務局：606-8799 左京郵便局私書箱5号「京大植物園を考える会」

<http://members.at.infoseek.co.jp/bgarden/>

kyotoubg@hotmail.com